

東アジア海域会議の概要 (The East Asian Seas Congress 2009)

会議テーマ：パートナーシップの現況／地域における実施と優れた実践
(Partnership At Work : Local Implementation And Good Practices)

開催日程：2009年11月23日～27日

開催場所：フィリピン国際会議場（マニラ、フィリピン）

開催趣旨：EAS 会議（東アジア海域会議）は東アジア地域独自のイベントである。様々な国際団体、政府、地方政府をはじめ、学術団体、非政府組織、民間企業及び地域に根ざした各種団体から、政策決定者、専門家、管理者及び実践者が参加することにより、情報の共有、多部門・多分野にわたる協力の強化とともに東アジア海域の持続可能性に向けた着実な前進を促すパートナーシップの構築を図る。本会議の基本目的としては、既存及び新たな課題、特定の国・地域や世界レベルでの社会・経済及び生態学における目標の阻害要因を洗い出し、解決手法や手段に対する洞察力、革新的な考え方を生み出す環境づくりをねらいとしている。また、本会議では、東アジア地域全体の海洋及び沿岸海域の持続可能な管理の向上のための重要な要因である「地域での実施と優れた実践」に焦点を当てる。

会議テーマ及びワークショップ：

○ テーマ 1 沿岸域及び海洋の統治

- T1.1 沿岸/海洋政策と立法（実施と新しいイニシアティブ）
- T1.2 不確定な気候における海洋経済分野の地域および国の GDP への貢献
- T1.3 大陸棚（2009年5月展望のその後）
- T1.4 地域および小区域海域での協力を通じた国境を越えた問題への取り組み（東アジアにおけるイニシアチブ）
- T1.5 生態系に基づく管理における科学
- T1.6 陸および海の使用区分（課題と機会）
- T1.7 海洋・沿岸問題のための国家施策化・予算確保のためのワークショップ

○ テーマ 2 自然のおよび人為的な危険（汚染）防止と管理

- T2.1 東アジアにおける海洋汚染に対する効果的および一貫した準備のための政府/産業によるパートナーシップ
- T2.2 統合沿岸管理を通じた地域レベルの気候変動の課題への対応
- T2.3 東アジア海域の沿岸および海洋地域における気候変動の影響
- T2.4 生物多様性に関する条約との関係における海洋バイオセーフティーに関する発展と進歩

○ テーマ 3 生物の生息環境の保全、修復及び管理

- T3.1 海洋保護区のネットワーク作り（利点、優れた実践、基準および次のステップ）
- T3.2 生物の生息環境の保全と修復に向けた取り組み（里海やその他の取り組みについての経験）（プログラムの内容は添付の通り）
- T3.3 生物多様性及び生物の生息環境保全のための技術革新（得られた教訓）

○ テーマ4 水の利用と供給管理

T4.1 代替エネルギー：離島等遠隔地へのエネルギー確保方策

T4.2 急速に成長しつつある都市における水に関する危機への取り組み

○ テーマ5 食糧確保と生活（暮らしぶり）の管理

T5.1 持続可能な養殖の統合沿岸管理への組み込み

T5.2 都市化世界における漁業の今後の役割

T5.3 生活管理と持続可能な沿岸観光

○ テーマ6 汚染の軽減と廃棄物管理

T6.1 河川流域および沿岸海域における国境を越えた汚染軽減

T6.2 水供給、衛生および汚染軽減における革新的な方針と実践

参加国、参加者数

- ・参加国／団体数：43ヶ国（内、EAS諸国14ヶ国）、36国際機関
- ・参加者：約1,400名

その他関連イベント：

- ・第3回閣僚フォーラム：統合沿岸・海洋管理を通じた気候変動への適応（11月26日）
- ・持続可能な沿岸及び海洋開発に関する国際会議：地域における実施と優れた実践（11月23日～26日）
- ・ブース出展：革新的技術及び優れた実践事例の展示（11月23日～26日）
- ・第2回EASユースフォーラム：若者、海洋及び気候変動（11月23日～26日）
- ・沿岸や海域への企業の社会的責任とマニラ湾の持続可能な発展（11月25日）等

EAS Congress の開催状況



フィリピン国際会議場



EAS Congress 開会式



里海 WS の全体討論



里海 WS の講演者及び事務局

EAS Congress の SATO-UMI WORKSHOP プログラム

EAS Congress 2009
International Conference
Habitat Protection, Restoration and Management (T3)

T3:2
SATO-UMI
WORKSHOP

**Indigenous Approaches to Habitat Protection and Restoration:
 Experiences in Sato-umi and Other Community Initiatives**

24 November, 2009
 Philippine International Convention Center, Manila, Philippines
 Summit Hall D

Convener:
**Partnerships in Environmental Management
 for the Seas of East Asia (PEMSEA)**

Co-Convener:
International EMECS Center, Japan

Oyster Beds (Hiroshima Pref., Japan)

Program

Chair: Matsuda O., Hiroshima University (Professor Emeritus), Japan
Co-Chair: Yanagi T., Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University, Japan
**Co-Chair: McDonald A., United Nations University, Institute of Advanced Studies, Operating Unit
 Ishikawa/Kanazawa, Japan**

10:30-10:35 Opening Address by International EMECS Center
 Introduction by Workshop Chair

10:35-13:00 Part 1: The Sato-umi concept and its application in Japan: lessons and
 application
Chair: Yanagi T., Co-Chair: Matsuda O.

10:35-10:55 P1-01 Concept and practices of Sato-umi in Japan and lessons learned
Yanagi T., Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University, Japan

10:55-11:15 P1-02 Concept and practices of Satoyama Sato-umi Sub-Global Assessment in Japan
**McDonald A., United Nations University, Institute of Advanced Studies,
 Operating Unit Ishikawa/Kanazawa, Japan**

11:15-11:35 P1-03 Case of Fushino River Estuary Initiatives in Japan
**Ukita M., Sekine M., Yamamoto H., Yamaguchi University, Yamaguchi
 Prefecture, Japan**

11:35-11:55 P1-04 The Ago Bay Management Initiatives in Japan
Maegawa M., Uranaka H., Mie University, Japan

11:55-12:15 P1-05 Potential of urban wetland as a target of habitat restoration and management
**Furukawa K., National Institute for Land and Infrastructure Management,
 Japan**

12:15-12:35 P1-06 Community-based sea grass bed restoration and management in Seto Inland Sea:
 Case of Akou Coast in Japan
Matsuda O., Hiroshima University (Professor Emeritus), Japan

12:35-12:55 P1-07 Supporting activities for the creation of Sato-umi in Japan
**Muroishi Y., Yamada T., Ogawa N., Office of Environmental Management of
 Enclosed Coastal Seas, Ministry of the Environment, Japan**

13:00-14:00 Lunch

14:00-16:20 Part 2: Indigenous knowledge and community based approaches in protecting,
 restoring and managing key habitats
Chair: McDonald A., Co-Chair: Yanagi T.

14:00-14:15 P2-01 Implementing an ecosystem approach to coastal management through
 community based organizations: An example from the Andaman coast of
 Thailand
Soonthornnawaphat S., Silva J., IUCN, Thailand Programme, Thailand

14:15-14:30 P2-02 Implementation of *Tri Hita Karana*, a local wisdom of Bali to maintain
 agricultural resources
**Suprpta D. N., Director School of Postgraduate Udayana University,
 Indonesia**

14:30-14:45 P2-03 Developing a mechanism of mobilization of various human and material
 resources in planting, taking care and protecting urban green trees in Danang city
Hai T. C., Danang Department of Natural Resource and Environment, Vietnam

14:45-15:00 P2-04 Community Involvement in Coral Reef Restoration Projects in the Gulf of
 Thailand
**Yeemin T., Saenghaisuk C., Pengsakun S., Sutthacheep M., Marine
 Biodiversity Research Group, Department of Biology, Faculty of Science
 Ramkhamhaeng University, Thailand**

15:00-15:15 P2-05 Evaluation of Artificial Reefs in West Coast, Peninsular Malaysia
**Ismail I., Noh K. M., Arshad F. M., Noh A. F. M., Institute of Agricultural
 and Food Policy Studies Universiti Putra Malaysia, Malaysia**

15:15-15:30 P2-06 Community-based management approach at work in the Muan Wetland
 Protection Area: Changing perception, changing practice and changing policy
Jang J. Y., Choi Y. R., Eco-Horizon Institute, Korea

15:30-15:45 P2-07 When the cradle falls: A case of management failure in a community marine
 reserve in southern Philippines
Guzman A. B., Mindanao State University at Naawan, Philippines

15:45-16:00 P2-08 Conceptual framework of organizing communities for effective mangrove
 management
**Savaris J. P., Joven R., Rodney Golbeque and Edison Advincula Zoological
 Society of London, Philippines**

16:00-16:15 P2-09 Indigenous approaches to access, control and protection of coastal resources:
 A review of some Philippine Experiences
**Ferrer E., University of the Philippines, College of Social Work and
 Community Development, Philippines**

16:20-16:40 Coffee Break

16:40-18:10 Part 3: Discussion panel:
 Interactive session/wrap-up: Institutionalizing community-based efforts in
 habitat protection, restoration and management within an ICM framework
Chair: Matsuda O.
Panelists: Yanagi T., McDonald A., Ferrer E.

MEMO

This workshop is supported by The Nippon Foundation

第3回 EAS コングレス（2009.11.23～11.26）における 里海ワークショップの開催概要

主催共催：PEMSEA・国際エメックスセンター

座長：松田 治（広島大学名誉教授）

副座長：柳 哲雄（九州大学教授）

副座長：あん・まくどなど（国連大学高等研究所長）

1. 日時 平成21年11月24日 10:30～18:30

2. 場所 PICC サミットホールD

3. 参加者 約100名（関係者含む）

4. 概要

里海ワークショップは、別紙のプログラムに従って開催された。各パートにおける、開催の内容を以下に示す。

（1）パート1（日本での様々な事例紹介）

まず、九州大学の柳教授から、「里海」の定義の紹介とともに、欧米と日本での海洋保護区（MPA）の違いに関する説明等が行われたほか、七尾湾（石川県）、山口湾、英虞湾（三重県）、東京湾、播磨灘（兵庫県）など、日本各地での里海創生活動の事例紹介が行われた。

セッション最後に環境省から、日本政府による里海創生支援事業の紹介が行われた。パート1は「里海」の概念と、日本における取組事例について焦点を当てて進められた。

（2）パート2（東アジア各国での様々な事例紹介）

タイ、インドネシア、マレーシア半島、ベトナム及びフィリピンにおける、地域に根ざした発想と取組事例の紹介が行われた。

珊瑚礁復元プロジェクトがエコツーリズムや教育面で効果をもたらした事例（タイ）、人工岩礁の設置によって魚の生息環境を向上させた結果、地元水産業に恩恵をもたらした事例（マレーシア）のほか、従前から市民レベルで保全管理していた地域が国営保護区に格上げを契機に地域社会の参加が失われ、環境が劣化した失敗事例（フィリピン）等の紹介がなされた。

また、「人は自然の一部である」というヒンズー教の文化にまつわる、調和とバランスを尊ぶ思想が現代に至るまで脈々と語り継がれているという事例（インドネシア）、先祖伝来の教えに従い、目に見えない精霊や儀式を尊び自然を守るポリネシア由来の思想（フィリピン）等、日本人の心にも通じる事例紹介が行われた。

（3）パート3（パネルディスカッション）

パート3では、これまでのセッションを振り返って、里海の実践に向けたアプローチについて熱心な議論が展開された。

「適度に人の手が加わることにより新しい海の生息環境を生み出すことが出来る」（パート1：柳教授）、「生物の多様性だけでなく、文化の多様性にも留意する必要がある」（パート2：あん所長）と概要総括があった後、パネルディスカッションから参加したフィリピン大学のフェレル教授より、画一的な枠組であるICMのみに依存するのではなく、自然と人間の関係（生態系）、里海とICMといった面も考え、先人の知恵から学ぶ重要性についての示唆を受け、松田名誉教授からも、地域に伝来する先

人の知恵への期待についてのコメント等多数の意見交換があり、ワークショップを終了した。

5. 里海ワークショップの総括

- (1) 沿岸及び海洋資源の持続可能な利用を保持していくためには、様々な関係者（地域社会、科学者、民間企業及び地方政府）による、長期間に及ぶ協力関係の維持・継続が必要である。
- (2) 生物の生息環境を保全・修復するために、環境を守る伝統的な知恵、先人の知恵及び文化的な信仰等、地域社会に根付いた多様なアプローチがあることを確認した。持続可能な新しいモデルに発展させていくためには、沿岸地域社会における自然保守の伝統的な知恵習慣と現代的な科学を融合することが不可欠である。
- (3) 沿岸地域社会は生息環境の悪化と消失の危機にさらされており、里海概念とその実践こそが、地域社会と自然との関係をはかる重要な切札となるであろう。

テーマ3 生物の生息環境の保全、修復及び管理

ワークショップ2 生物の生息環境の保全と修復に向けた取り組み(里海やその他の取り組みについての経験)

時間	発表
10:30 – 10:35	国際エメックスセンターより開会の辞 里海ワークショップ座長(松田 治 広島大学名誉教授)より趣旨説明
Part 1: 里海 の概念と日本における適用: 教訓と適用結果	
10:35 – 13:00 座長: 柳教授 副座長: 松田名誉教授	<ol style="list-style-type: none"> 1 日本における里海 の概念と実践例及び得られた教訓(柳 哲雄九州大学教授) 2 日本における里山・里海サブグローバルアセスメントの考え方と実践例(国連大学高等研究所 あん・まくどなど所長) 3 榎野川河口での取り組み(浮田正夫 山口大学名誉教授) 4 英虞湾での環境管理事例(前川行幸 三重大学教授) 5 生息環境の修復と管理を目的とした都市湿地の可能性(国土技術政策総合研究所 古川恵太室長) 6 瀬戸内海における地域に根ざした藻場再生と管理: 赤穂海岸での事例(松田 治広島大学名誉教授) 7 里海創成支援活動(環境省閉鎖性海域対策室 山田主査)
13:00– 14:00	昼食
Part 2: 主要な生息環境の保全・修復・管理における地域に根ざした取り組みと地域の知恵	
14:00 -16:20 座長: あん・まくどなど所長 副座長: 柳教授	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域に根ざした組織を通じた沿岸管理への生態系アプローチの実施(タイ アンダマン海岸の事例) 2. インドネシア バリ島における農業資源維持の地域に根ざした発想法 Tri Hita Karana の実践 3. ベトナム ダナンにおける都市緑化を目的とした植樹、緑の育成、保全における様々な人的及び物的資源を動員させるメカニズムの開発 4. タイ湾におけるサンゴ礁修復プロジェクトへの地域の関わり 5. マレーシア半島西海岸における人口岩礁の評価 6. 韓国 Muan 湿地保護区における地域に根付いた管理アプローチ: 認識・習慣・施策を変えること 7. フィリピン南部における地域海域保全管理の失敗事例 8. マングローブの効果的な管理を目的とした地域社会づくりの概念的取り組み 9. 沿岸資源へのアクセス、管理及び保全に関する固有のアプローチ(フィリピンの経験より)
16:20 – 16:40	休憩
Part 3: パネル討論: 統合的沿岸管理としての生息環境の保全・修復・管理に関する地域に根ざした取組事例の制度化	
16:40 – 18:10 コーディネーター: 松田名誉教授	パネリスト 柳 哲雄教授、あん・まくどなど所長、Elmer Ferrer 教授

1. アンケートの結果

1-1. 有効回答数

34人（日本人1名除く）

	カンボジア	中国	タイ	東ティモール	フィリピン	インドネシア	マレーシア	合計
回答者数	2	1	2	1	23	4	1	34

1-2. 問①：里海という言葉聞いたことはありますか？

	カンボジア	中国	タイ	東ティモール	フィリピン	インドネシア	マレーシア	合計
ある	0	0	1	0	2	2	0	5
ない	2	1	1	1	21	2	1	29

1-3. 問②：沿岸域の環境を保護、修復することを目的とした里海創生活動について、貴国の状況をお聞かせ下さい。

- (1) 政策として奨励されている
- (2) 環境団体等によって実施されている
- (3) 漁業者等により、日常生活の中で実施されている

(複数回答含む)

	カンボジア	中国	タイ	東ティモール	フィリピン	インドネシア	マレーシア	合計
(1)	1			1	9	1		12
(2)	1		1	1	11			14
(3)			1	1	6			8

【主なコメント】

- (1) 政策として奨励されている
 - ・まだまだ里海創生にむけた政府の支援が必要である。(フィリピン)
 - ・政府が環境改善のために政策として推進しようとしている。(フィリピン)
 - ・バリの地方政府は里海と似たような活動 (Tri Hita Karana) を政策として実施している。(インドネシア)
- (2) 環境団体等によって実施されている
 - ・地域関係者によりサンゴ礁の再生がなされている。(フィリピン)
 - ・政府の支援は無く ICMはNGOによって実施されている。(カンボジア)
- (3) 漁業者等により、日常生活の中で実施されている
 - ・ミンダナオ島では漁民が組織化され、特に保護海域で沿岸資源管理を実施している。(フィリピン)
- (4) その他の意見
 - ・里海の実践は我が国でも効果的だと思う。(東ティモール、インドネシア)
 - ・里海創生は、海洋環境を保護し、持続的な海洋開発を行うための世界共通の概念になると思う (インドネシア)

1-4. 問③：里海創生を実施するにあたり、直面すると思われる課題は何ですか？

- (1) 政治体制
- (2) 財政
- (3) 組織

(複数回答含む)

	カンボ ジア	中国	タイ	東ティ モール	フィリ ピン	インド ネシア	マレー シア	合計
(1) 政治体制	1		1		6	2		10
(2) 財政	2		2	1	17	1	1	24
(3) 組織	2		1		8			11

【主なコメント】

(1) 政治体制

- ・経済開発を優先しており、環境には関心が少ない（フィリピン）

(2) 財政

- ・教育と防衛に力が入れられ、環境事業への予算は少ない（フィリピン）
- ・財政面、人的資源において不足している。日本のような先進国から技術・財政的支援が必要（カンボジア）

(3) 組織

- ・組織の構造が不明確（タイ）
- ・政治的リーダーシップ、市民の関心が欠如している（フィリピン）

(4) その他の意見

- ・全ての問題に直面している（インドネシア、フィリピン、タイ、カンボジア）

1-5. 問④：その他、里海創生に関して、あなたの印象や意見などをお聞かせ下さい。

【主なコメント】

- ・里海について、良く理解できた。（東ティモール）
- ・里海のアプローチは沿岸管理にとって重要だが、地方政府の支援や協力が必要である。（フィリピン）
- ・大変興味深く、全ての発展途上国に広めるべきだ。（インドネシア）
- ・日本は政府の支援が得られているためにうまくいっていると思う。地域住民を巻き込むことは里海活動にとって効果的である。（フィリピン）
- ・一般市民や生徒向けの里海セミナーを希望する。（フィリピン）
- ・里海の実践や活動が普及すれば、より良い沿岸域管理が可能になると思う。（フィリピン）
- ・里海の実践は、バリ島を含む他国で適応できる実践できるレベルに作り上げられるべきだと思う。（インドネシア）